

# 東北被災地自治体への派遣職員座談会

## 東北大震災のこと、 私たちは忘れない！

### 東北被災地自治体への派遣職員座談会

所属	氏名	派遣先	職種	期間
福井県	戸庭 隆之(トニワ タカユキ)	宮城県石巻市	漁港復興	2011.12~2012.1
福井市	工谷 新吾(クタニ シンゴ)	宮城県塩竈市	復興推進課	2012.10~2013.3
越前市	小嶋 雅則(オジマ マサノリ)	宮城県塩竈市	登記事務	2013.1~3
坂井市	倉矢 徹(クラヤトオル)	福島県福島市	被災家屋判定	2012.5~7

編集部 3・11を忘れないことが大切です。東日本大震災は全国民が衝撃を受けました。自治体の職員も大変な目にあつたことを忘れてはいけないうし、伝えていくことが大切だと思っています。また、現在も被災地に支援派遣されている職員も多いです。実際に現地で活躍されてきた皆さんから当時の状況や仕事の内容を聞かせてください。



戸庭 県の土木部砂防防災課に所属している。平成23年12月から平成24年1月まで宮城県石巻市へ派遣されていた。石巻市では県の合同庁舎にある水産漁港部で漁港の復旧の仕事にあつた。具体的には、12月は災害査定をし、1月には実施工事の発注準備に携わつた。石巻市では、築43年になる県の職員住宅に同じように派遣されてきていた職員と2人で入居し食事は自炊。職員住宅は災害時は水没していた建物だった。街中までは15分くらいのところだった。

倉矢 福島市に平成24年5月から7月にかけて派遣された。仕事は被災家屋の判定業務でした。建物について全壊・半壊の判定をする仕事で、固定資産税の減免や見舞金の支給に影響してくる業務だった。住居は近くのレオパレス。スーパーが近く、その点では便利だった。福島市は人口29万人くらいで福井市くらいのイメージだが放射能の影響により1万人くらい人口が減っていることが問題になっていた。



工谷 建築関係が専門。自分も子供がいるので親として何か出来ないかとの思いから自分で志願した。志願して派遣が決まったが、受入先や担当業務の関係で、派遣開始が平成24年10月となり、平成25年の3月までの期間にやっと行くことができた。派遣先は宮城県塩竈市。壊滅状態の魚市場の整備事業に携わつた。前任者が解体の発注をしていたので、解体の検査後、建設の計画を担当した。住んでいたのは塩竈市がアパートを借

りてくれ、そこに住んでいた（アパート名ミルクハウス）。震災の影響で建物のあちこちに隙間があった。基本的には自炊だが生活は



役所からは歩いて20分くらい。独身気分での生活はさびしかったが少し楽しかった。

小嶋 塩竈市に平成25年1月から3月までの3か月間行ってきた。

復興を進めるために、土地の所有などの権利関係を調べ土地の移転などの登記を行う仕事をした。ただし、登記業務といってもまだ実際に登記をするところまで進んでおらず、登記のために必要な相続関係などの事前調査をしていた。

塩竈市には有名な日本三景・松島がありそこには人が住んでいる浦戸諸島という4つの島があったが地震と津波ですごい被害だった。塩竈市の本土は島が防波堤の役割をしたため比較的被害が少なかったと聞いた。集団移転の区域などの地権者の相続関係を調査して

何とかなっ

た。妻のあ  
りがたみを  
ものすごく

感じた。市

いたが昔から登記が変更されていない土地もあり、古くは江戸時代のままだったものもあった。前任者が3ヶ月間かけて調べた後を引き継いで、ひたすら相続関係を調査したが十分に調査できなかった。後任者にその後の調査を残して戻ってきてしまっして申し訳なかった。



仕事同様、休日もがんばってき  
た。せつかくの機会なので休日も  
いろんな地域に出かけて見聞を広  
めてきた。  
近くの松島  
町や石巻市  
へも行って  
みた。市に

よって復旧の状況は違う。テレビで見えていたのとも違う。3ヶ月間いい経験をさせてもらったと思っている。

編集部 皆さんが行った時期によ

り復旧の状況が違うのではないかと感じています。またそういう部分はテレビでも伝わらないものだと思います。個人的な感覚でいいので感じたことを教えてください。

戸庭 震災その年の冬に行った。災害査定業務の終わり頃になる。

宮城県は県営で11漁港、市町で46漁港ある。石巻市の近くでは女川漁港など大きな漁港もある。聞いた話だが、震災当日、私が仕事をしてきた合同庁舎は浸水し、3日間水が引かなかった。遠くに見える海岸では何かが燃えていたらしい（学校だったと聞いた）。浸水はポンプで排水した。船が漁港内の陸に乗り上げていた状態。地盤



対策には土のうを置いた。水門自体も沈下してしまい、作り直しが必要になっていた。

査定業務自体がものすごい業務量になるため、査定の現場には10人が応援に来ていた（福井のほか高知、宮崎、東京、鹿児島などから来ていた）。それでも月1000時間の残業状態だった。漁港の職員が通常業務を行い、応援職員が査定を行っている状況だった。民間の設計会社の人でも20〜30人くらい動員し、設計書の作成などをしてきた。工事をするかどうか？人が戻るかどうか？漁港の再開ができるかどうか不明のまま、とりあえず査定を受けている状況だった。

が全体的に1m沈下しており、満潮で浸水してしまう。水没した土地もある。私が行った時には、ガレキの処理は進んでいた（処理ではなく集めただけが・仮置き場に集めていた）。沈下した土地の仮復旧、道路のかさ上げ、浸水

復興の方針が決まらないので建物を建てるができない。大企業や余裕のある民間企業は自分で土地を1〜2mかさ上げして工場などを建設し営業開始していた。査定はすぐにはしないとダメ。ただし震災によるものなので通常より基準を緩和しており、5,000万円までの査定は机上で可能となっている。復興予算を確保する必要もあり、とても間に合わない状況の中、必死に頑張っている状況。



災害の場合、基本的に3年間との期限があり、災害の規模により期限の延長があったりするが、東日本大震災では、政府はまだ基本の3年間としか言っていない。

入札しても不調になることも多く（受けれない、人手がない、機械がない、条件のいいものから落札する等）、工事が進んでいない。

**倉矢** 平成24年5月に行った。私が行った時は、眼に見える被害はなかった。瓦が落ちているが修理が間に合っていない。福島の特徴なのかもしれないが放射線のモニタリングポストが目についた。小学校や保育所など市内で330か所くらいあったと思う。1, 4 2 3 マイクロシーベルトという数値が

出る。これは坂井市の30倍くらいの数値。市内では除染作業をしているのが目についた。

小学校のグラウンドなどで校庭の土を入替していたが、一校あたり2〜3億円かかる。公民館には野菜などの放射線を計測する機械が設置され、市民が持ち込んで測定をしていた。15分くらいで計測可能だが、5000ベクレルなどという数値が出ていた。眼には見えない放射能と言うものの怖さを感じた。

滞在していた時に南相馬市の立ち入り禁止が解除されたので行ってみた。震災から1年2カ月後だったがガレキがそのままになっていた。放射能がその他の被災地とはまったく別の状況を作っていると感じた。

福島市では、みんなが普段から測定器を持っていたりはしない。悪い意味で慣れている。ただし子どもについては親は真剣に考え不安も強かった。派遣から帰るときは、内部被ばく調査をした。測定器は8000万円くらいと聞いた。

ないことも問題とされていた。

**倉矢** 地域によって差が出ているのは、3号機の爆発の時の風向きの問題や、雨が降っていたかどうかなどによるらしい。

**編集部** 福井市職労が福島県の立ち入り禁止区域内で昼の間だけ許可をもらって入れる場所へ視察に行った。それが今年の3月のことだが、あたりにカラスもいない。鳥すらもいない。周囲で音がせずシーンとなっている状況だったようですね。

**倉矢** 入口で警察が立っているところを抜けると、ゴーストタウンになっています。

**工谷** 去年の10月に石巻市や南三陸町に行った。若干ガレキは減っているが復興は進んでいない。ボランティアもいた。解体されな

い家も残っていた。塩竈市も1m〜70cm地盤が下がった。雨が降ると冠水する状況、満潮時には一部冠水する。震災後から今の状況になっている。かさ上げをするかどうかは今後の問題

となつている。今は生活が優先されている。

道路をかさ上げしても相対的に民地が低くなってしまふ。魚市場にもかさ上げの予定はあるが範囲が広く追いつかない。三年という期限が県にプレッシャーになっているのではないか。材料の生コンなし、人手もなしの状況。

塩竈市では、震災から2年くらいたっているのに、ガレキはない。本土（市中心部）は更地にはなっている状況。島の方ではかさ上げが若干進んでいるがまだ一部分でこれから進んでいく予定らしい。防潮堤については、島部は4m、本土は3・3mの防潮堤を計画している。当然反対もあり島の人

が反対している。島の景観が変わる、今までの生活が変わる。県も仕事にかかれない状況。検討が必要。復旧事業のため仮設の市場をつくれな

しないとダメだと感じた。

塩竈市は島のおかげで本土に被害は少なかったため、島を復興させたい思いがある。しかし県はどうしても本土優先となりがち。塩竈は漁港の町であるため、放射能のチェックはしている。600万円

円で放射能測定機械を導入した。タラのような底に住む魚に放射線が出るが多い。一定の数値が出た場合、県で調査をする。役場にも測定器がある。市としての復興は進んでいると思う。県の人は国と市に責められて板挟みとなり大変だと思う。

小嶋 1月2日に向こうへ行った。3日に市内をまわった。ガレキはなかった。しかし建物もなかった。ところどころですが、お正月の雰囲気はあったが「やっぱり被災地なんだな」と感じた。北浜地区のほうに少し残っていたガレキも3月の帰るころには撤去されていた。

島部もガレキは片付いていた。しかし住宅のかさ上げするのか、住宅を移転するのかは決まっておらず、復興は進んでいない。買いのなどでお店に行き話を聞いて

も震災で水没し移転したとか聞いた。また被災後の後片付けから再開するまでに一年かかったとの話も聞いた。

買い物や食事でお店に行くと、お客はいっぱい入っていた。工事の人がいた時(ガレキ処理の時)は、もつとにぎやかだったらしい。仙台などは復興バブルと言われていたと聞いた。

編集部 集団で高台へ移転する。防潮堤で対策をする。町でいろいろ違うようだが、どのように感じましたか。地域の人が住み続けたいと意思表示をしている話も聞きます。地域の人と話したことはありますか？

工谷 集団移転は意見がなかなかまとまらない。島については、危険な区域を定めれば強制的にできる。津波対策としては防潮堤をつくる。水が来ても大丈夫なように対策をとる。離れたくない人もいる。

小嶋 被害が少なかったところは自力で再建した復興市場のようなどころもある。店が水没した所

などは再建をあきらめて移転したり、プレハブで営業しているところもある。自分たちの職場もプレハブだった。東北の人は基本的におとなしいイメージがあったが、三月に職場で大きな声を出した人がいた。いろんな思いがある。復興が進んでない、進められない。情報が出していないことが問題だと思う。

工谷 役所なので未確定の情報は出せない。出したいけど出せない。魚市場は業界の人の声を聞いて動けるし、業界の人は声をまとめやすく協力してくれた。そこは住民とは違うところ。

編集部 家屋判定の仕事なら住民とは触れ合う機会が多いと思うが、判定が特に甘くなったりしないですか？復興が進んでいないとよく言われているが個人生活よりも産業が優先の感じですか？

倉矢 家屋判定は基本は2人ペアで動く。全壊・半壊になると見舞金が出るなどがある。基本的には事前に判定方法を説明し点数を付けて判定する。納得がいかなければ建築士も連れてきて再判定をする。マニュアルがあるし、感情で判定はかわらない。微妙なところで個人差はあるかも知れないが基本的には公平にすることを考えた。家屋の持ち主もし、状況を話しながら、確認しながら作業を行う。



工谷 塩竈市は個人も産業も同時でやっている。差が出るのは話

がまとまるかどうかではないか。住民はいろいろ思いがあるのとまとりにくい。塩竈市の本土は進んでいて、島部はこれから。市場はまとまりが良い。近隣の大きい市場の復興状況を気にしており、そこよりも先に復興したいという思いがある。

震度3の地震は普通という感じ



でけっこうあった。震度2でも建物によってはひどく揺れる。

**編集部** 心を病んでしまう人が出ていると聞く。支援の派遣職員が自殺というニュースも聞いた。住民や職員のメンタルヘルス対策はどうなっていましたか？

**小嶋** 自分は全然問題なかった。自殺した人は仮設住宅に入っていたと聞いている。仮設住宅だと状

況が全然ちがうのでは。

**戸庭** 元から働いている専門の職員がメンタルになっている。職員自身も被災し業務も増えたという厳しさがあった。でも自治体職員だから休めず家庭や家族の要求にもこたえられないという辛さがあるようだった。

**工谷** 福井市は派遣職員に対しアンケートを取って判断している。また、半年くぎりで派遣することに決めている。個人的には若い人に勉強がてら行ってほしい。福井にいても被災地にいてもやることは同じ、他県の人と情報交換もできた。

土日が割と自由だったので、派遣先だけでなく他の場所へ行くなど自分の勉強にもなった。ただ仕事期間で区切られたことで、心残りがある。「やりとげていない」との思いがあり悔いが残る。ありがとうと言われたが、逆に短期間で、中途半端で申し訳ないとも思った。

**戸庭** 2ヶ月ではなにもできなかった。

**小嶋** 数か月単位で生活をする、近くのお店など顔見知りもできる。帰る際にはさみしくなると言われた。

**編集部** 福井市職労は大和田元氣まつりなどで被災地のパネル展示をしました。災害を忘れないことが大切だと思います。被災地は忘れないが他が風化しやすいと言われていて。この点はどのようにお考えですか。派遣されたことを縁として派遣先自治体とのつながりを持つことは大切ですよ。

**小嶋** 3月10日に「塩竈うまいもん&ご当地！グルメフェア」があった。塩竈市と塩竈へ職員派遣している自治体に参加して行われた。このような活動を年一回でも続けることが大切。みんなに来てほしい。

派遣した自治体にも話が来ている。たけふ菊人形に塩竈フェアをおこなう形も検討していきたい。市民にも派遣している事実を知ってもらおう&買い物をするなどで復興支援ができるが良い。また知ってもらうことで旅行などにつながることも大切。観光客は減ったと

聞いた。みんな地震のテロップも気にせず見えなくなっている気がする。

**工谷** 被災地へ行った人間がどう伝えるか、それしかない。大きな地震があると耐震診断などの申込みが増える。災害がないと考えが変わらない。風化してしまう。慣れるのが怖いと思うが、実際には慣れる。派遣され現地にいると余震にも慣れる。

派遣された職員が伝えないとダメだが、派遣された職員も当時の状況は分からない。災害発生当時は帰れない、食べ物もない、あっても市民を優先するため職員の分はない状況だったと聞いた。

**編集部** 自治体職員は、被災地に人を出して応援し頑張っている。応援を出す方も人が余っていて出している訳ではない。

公務員たたきが強いが地道に頑張っていることを伝えたいといけない。人員削減をしすぎたから復興のための手が足りない現実も報道されている。

**工谷** 自分が派遣されることで

職場が一人減となった。職場の人には迷惑を掛けたと思うし申し訳ないと思ってる。行った経験をどうやって伝えるか。ただ被災地へ派遣されて仕事をしただけでは面白くない。

復興庁はあまり役に立っていない。何をしているがよくわからなくて欲しい。技術系の職員も復興庁へ入れて欲しい。技術的な説明をするだけでも余分な仕事が増えている。

民間の復興が遅れている要因の一つだ。県の人は本当に大変だと思う。市は言いたい放題だし、国も言うだけ。ただ自分が設計したものを完成した後に見に行くのは楽しみ。

**編集部** 国の対策は「お金はつけた。なんとかしろ」にしか見えない。入札も不調、人手もなし。

国家公務員の給与7・8%削減分はどこへ行ったのか。

自治体の業務を直接できるのは自治体職員にしかできない復興支援だと思えます。派遣後の活動では何かしていますか。

**小嶋** 越前市は塩竈市のイベントに参加したが、それに合わせて、

職員組合も派遣職員の状況確認として役員が参加した。

マスクミを含めて一般の人に発信しないと職員の苦勞も、活躍も伝わりません。越前市では職員組合で派遣職員全員の報告会をやる必要がある。誰でも聞ける場所を作ることを考えるべきです。丹南自治研センターで市民セミナーも開いています。

**工谷** 職員研修で報告をしました。少しでも多く伝えたいと思う。

**戸庭** 自分の事務所で発表をした。他にも発表する機会があるといい。

**小嶋** 塩竈では、国の人がある対応で手を取られる。自分は現場に行った立場で説明をしたが、写真を出すだけではそれほど関心を持たれないのではないか。

越前市は寄付もずっと続けている。

**編集部** 支援の宣伝をしたらダメなのではないかと思ってるので。市の職員がやっていること、発信が大事ですね。

被災地の自治体の職員はどんな

感じで仕事をしていましたか？

**戸庭** 疲れている人、休んでしまっている人がいたが、みんな頑張っている。県庁と出先のギャップもあった。本庁は結果を早く求めすぎると感じた。

**倉矢** 被災直後は多忙。1年たって落ち着いた。燃え尽き症候群のようなものかと思う。

**工谷** 2年くらいたって少し落ち着いている。逆に派遣職員に対して気を使ってくれた。メンタル面をカバーしてくれ、食事にも誘ってくれた。小さい市はのんびりしている。地域性もあると思う。

**小嶋** みんな落ち着いていた。むこうが逆に心配してくれた。自治体の規模で仕事のスピードが違う。派遣されて行った職員には、そこらへんを気に入らない人もいた。

**全員** それはすごいニュースです。明るいニュースで座談会を締めましょう。

地元の人は心を開いてくれたと思う。塩竈市には福井から3人、各務原市1人、長野県から2人、横浜市から1人など全国から派遣応援に来ていたので、そうした職

員同士も仲良くなった。

**戸庭** 熊本から来た応援職員が地元の娘さんと恋仲になり派遣期間を延ばして、最後には結婚し奥さんとして連れて帰ったことがあった。

**編集部**

県 職…榊田編集委員  
福井市職…谷澤編集委員  
越前市職…江端編集委員  
自治研センター…伊藤副理事長  
…野田事務局長

